

三瀧忠道(みつただみち)先生のプロフィール

1978年 千葉大学医学部卒業。
千葉大学医学部附属病院第2内科、国保旭中央病院内科、
富山医科薬科大学附属病院和漢診療室(後に医学部和漢診療学講座)
1992年 麻生飯塚病院漢方診療科部長に就任。
2002年 麻生飯塚病院東洋医学センター所長に就任。

他に(博愛会)ももち東洋クリニック、日本漢方医学研究所附属渋谷診療所医師を兼任。
専門は東洋医学全般(湯液、操体)。
現在は、福島県立医科大学会津医療センター附属病院副病院長(業務担当)、
漢方医学講座 教授

◆先生が初めて漢方と出会われたのはいつ頃ですか

幼児期より虚弱で、かかりつけの内科・小児科医の他に、近所にいたおばあさん先生にいつもお世話になっていました。医者ではありませんが指圧のような揉み療治と、漢方薬(民間薬)での治療です。

治療は痛いのですが、体が楽になるのか、自分自身も頼っていました。
かかりつけ医も良導絡学会の役員で、漢方を否定せず、医者になるなら漢方も勉強しなさいと言っていました。

そんな訳で、漢方医になるために千葉大学に入学したところ、東洋医学研究会というサークルがあったので入会しました。結果的に現存する日本最古の漢方の団体で、藤平 健先生、小倉重成先生など、多くの素晴らしい先生に巡り合えました。

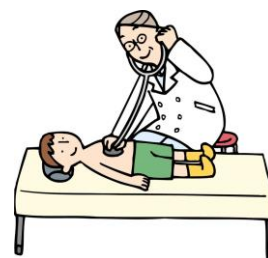
◆先生の御専門で漢方はどのような効果を発揮していますか

現代医学的には総合内科とでもいうか、特に専門を持ちません。
学位論文と関連して、慢性腎不全の漢方治療は多数例を経験しています。

保存期患者の7割で自覚症状や検査値の改善を認め、
透析導入時期の遅延効果もあります。

透析期患者では、発汗や冷えの改善効果などと共に、
QOL改善が認められます。
研究的にはラジカル産生の抑制や消去作用なども確認されています。

各種の難治性疾患、例えば強皮症、関節リウマチ、アミロイドーシス、
アトピー性皮膚炎、緩和ケア、高齢者医療などにおける
臨床効果が明らかとなってきました。



◆ 普段の治療で漢方薬と西洋薬との割合はどれくらいですか

ほぼ全例に漢方治療をしています。漢方本来の効能(と限界)を立証する目的で、第一選択は生薬ですが製剤も使用します。西洋薬の併用が5割近いでしょうか。

◆ 10年後の漢方医療はどうなっている(またはどうあってほしい)とお考えですか

『現代医学』の要素となり、西洋医学との併用が当然となって欲しい。そのためには教育システムの構築が急務だと思います。

メーカー側も安定した生薬供給に良識をもって努力してほしい。異常気象や新種のウイルス疾患も増え、温病学的な発想が要求される機会が増えるはず。

◆ 先生ご自身漢方を飲んで効果を実感なさったことがありますか

幼少時の経験のほか、学生時代に四逆散を服用したところ、気分が明るくなったことがあります。

体がだるくて仕方がなかったとき、通脈四逆湯を飲んで救われた経験もあります。元気が出ると辛くて飲めなくなります。

自分の風邪には手を焼きましたが、最近では桂枝加葛根湯服用後、10分程度で治ることが殆どです。



◆ これから漢方医を志す方に一言お願いします

治療学主体の臨床医学です。よき師を選び、初めはその診療をまねすることが大切。実習が大切で、本だけでは身につけません。一つの流れに集中し、あれこれと異なる流れの勉強をしないこと。一つの流れが身についてから、初めて視野を広げた勉強をすべきです。

◆ 漢方に関心のある一般の方に一言お願いします

漢方は、身体全体を自然に合った健康的なバランスに保つことで、自然治癒力を発揮させる医学です。関係ないと思われる症状や異常も、医師に十分に伝えましょう。思いがけない効果が期待できます。

漢方薬だけで不十分な点は、現代医学的な手段も十分に活用することが大切です。検査や西洋薬も毛嫌いせずに、必要に応じて活用しましょう。

漢方薬は貴重な資源です。健康保険診療では安価ですが、大切に服用し無駄にしないようにお願いします。



◆座右の銘、好きな言葉などありましたら教えてください

一所懸命 自然に随う



注意:先生へのインタビューは、当会が2003年11月に行った内容です。